

令和3年度寺田寅彦記念館友の会 総会報告

(文責 山本 健吉)

令和3年度寺田寅彦記念館友の会の総会を4月18日(日)午後1時から寺田寅彦記念館で15名の参加を得て開催することができました。

午後1時からの記念講演では、寺田寅彦の親友竹崎音吉の孫にあたります竹崎邦博様に新型コロナウイルス感染予防対策で2度の延期をお願いしたうえの「竹崎音吉と寺田寅彦の逸話」と題するご講演をいただきました。その内容の主なものを報告いたします。その後、総会を開催しました。



竹崎音吉と寺田寅彦の逸話

竹崎邦博

竹崎音吉の紹介

初めに、竹崎音吉について紹介をさせていただきます。

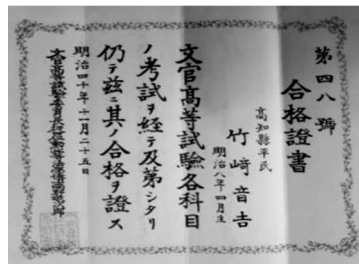
音吉は、明治8年4月2日、奈半利村に生まれ、寅彦より3歳年上です。高知中学校では、精神医学の森田正馬と一緒に卒業をしました。29名いたようです。そして、明治28年9月に森田正馬と熊本第五高等学校へ進学をしました。2年の時にチブスにかかり1年休学をし、森田に助けをもらったようです。

明治32年、五高を寅彦と一緒に卒業し、東京大学へ一緒に進学しました。

30歳頃までは、仕事もせずに、自由でいたようです。大学2年の時に竹中一枝さんと結婚し、明治37年30歳頃には、2人の子どもがいました。しかし、日記には、寅彦と毎日連れだって夕食をし、寅彦はお酒を飲まないが、音吉は大酒を飲まない日はなかったようです。

明治38年1月29日の寅彦の日記に「竹崎に行けば、日岡、西内、川崎来りて小宴を開けり。竹崎愈々日鉄へ入社、当分事務見習の為、上野駅へ出務と確定の由。」とあり、上野の車掌を命じるという辞令がありました。実際は、切符切りをしていたようで、計算してもお金が合わないということで自分が立て替えたりしていたようで、すぐにやめたようです。

これではいけないということで、友人の野並亀治が大蔵省の専売局に就職していたので、野並から浜口雄幸を紹介するというで会うことになりました。当時、専売局も人材が欲しいということもあったと思います。その時、浜口から文官高等試験に合格してくるよう言われたので、頑張ったのでしよう。2回挑戦をして明治40年11月25日に合格証書を受け取って、官僚の道に進んでいきました。



同僚は、大蔵官僚となってどんどん出世をして行っています。自分は歳も行き、回り道もしているのでこれは大変なことだと思ったようです。ものの本によると、東大時代の試験の点数で大蔵官僚の給料額は決まったようです。

音吉は、五高で1年休学するは、大学では落第するは、そしてやっと試験に合格ということで、競争にはならず、まわりのみんなはどんどん出世をしていました。

最初の赴任地は、福島県三春でした。ここは、自由民権運動の立志社と関係があって河野広中らと行き来があったようです。明治41年に三春の専売局に赴任し、そして広島府中、神奈川秦野・静岡見附・水戸・神奈川秦野・徳島・神戸・岡山・広島と2年ごとに赴任先が変わったようで、転居するのが大変だったことだと思います。今みたいに単身赴任ということがなかったため、家族そろっての転居ということでおばあちゃんも大変だったと思います。



そして、昭和2年に東京へ赴任することとなりました。

今あるのは、浜口雄幸のおかげであると日記には書かれています。

東京へ帰ってきた音吉は、寅彦との親交を深めることとなっていきます。そして、音吉は、昭和10年に寅彦の亡くなる2月前に亡くなっています。どうして秀才の寅彦とマイペースの音吉が親友であり続けてきたのかは不思議でたまりません。

父才吉の紹介

ここで音吉の父親才吉の話をさせていただきます。

高田屋3代目の商人(明治24年県会議員になる)で、魚梁瀬杉の材木を売ったり、樟の木から樟脳をつくったりして、長崎の岩崎弥太郎とも商売をしていました。また神戸の商店とも取引があったようです。また、自由民権運動にも参加し結社をつくって活動をしてきたようです。その中で財力を増やし、第80銀行を高知へ作り、取締役も務めた人物です。音吉は、父が明治26年に亡くなる時、高知の中学校の寮にいました。音吉は奈半利へ帰る時3つの山を越えて帰ったということです。手結山・古戦場八流・大山岬を超えて奈半利へ帰ったと思います。当時、奈半利から高知へ、高知から奈半利へ行くには、赤岡で1泊していました。赤岡は商人の町で、栄えていたようです。

おばあちゃんが結婚をした時も、赤岡で1泊したようです。そして、田野へ着いた時、当時は架け橋だったようですが、それが無くなっていたので、音吉がおばあちゃんを背負って川を渡ったそうです。

寅彦の初旅

明治26年12月、寅彦は従弟の別役^{れいよ}励夫と室戸にある東寺の住職の墓参りに行っています。その時、野市の親戚で1泊し、室戸へ行く時に加領郷で泊まっています。坂本のおばあちゃんの話では「加領郷では旅籠は私のところ1軒でしたので内に泊ったのでしょう」とのことです。音吉が寅彦より1級上ということで、その頃はあまり音吉のことを知らなかったから、奈半利の音吉の家に泊まらなかったのか

なと思ったことでした。奈半利を通る時には音吉の家の前を通るので、立ち寄ったりしたと思うのですが、それもなかったことからこの頃は親交があまりなかったのかとも思いました。

なぜ、寅彦や音吉は五高へ行ったのか

浜口雄幸は明治2年生まれで京都の三高へ行ったように、今まで高知からは京都の三高へ行っていません。関西圏で近いのに、なぜ熊本の五高へ行ったのだろうか不思議でならないということです。山田一郎説では、京都は雅やかで遊びばかりして退学者も出てきたりして環境があまりよくないので、熊本へ行ったのではないかということでした。また、明治25年に第2回衆議院選で民権派が勝ったことで、佐川の斗賀野事件が起こり10人も選挙で殺された悲惨なことや、高知の中学校もストライキをしたりしていたようで、高知を立て直すために安田町出身の石田英吉を知事として招いて大改革をしたようです。中学校も荒れているようなので、東京から千頭校長を呼んで改革もしたようです。その時に京都はよくないので熊本へ行くようになったのではないかと山田一郎先生は言われていました。

もし、寅彦が京都の三高へ行っていたら、夏目漱石や田丸卓郎に会うことはできなかつたし、五高へいくことによって生涯の師と仰げる人と出会えたということになります。

ある本によると、明治27年に新しい学校令ができて、京都の三高に予科がなくなり、三高へ行けなくなったようです。近畿・中国・四国は、今まで三高へ行っていたが、校区がなくなったということで、55人が五高へ転校したということです。大阪・兵庫・島根・香川・高知・愛媛が五高の校区となったようです。結果的には、学校令によって五高へ行くようになったということですが、山田一郎先生の話の方が、楽しいような感じがしています。

音吉の結婚

大学2年の時に竹中一枝と結婚をしました。おばあちゃんの話だと、寅彦の最初の奥さんの夏子さんと一緒に女学校へ行ってたようで、当時、女学校を卒業するまでに結婚をするというようなことがあったようです。おばあちゃんは3番目だったようで自慢をしていました。これがおばあちゃんの写真です。別嬪でしょう。この髪型は女性がしていたようで「203高地」という有名な髪型です。ものの本によると203高地が難攻不落で落ちなかったことから「私を口説いてもなかなか落ちないよ」という髪型だったようです。



16歳で結婚し、歩いて奈半利まで行き、1・2週間滞在して、そして東京へ行きました。おばあちゃんも不安だったでしょうね。その頃は、神戸まで船で行って、新橋まで東海道線で19時間かかったようです。東京では、寅彦や夏子さんと親交があったようですが、おばあちゃんが東京へ行ってから2か月後夏子さんは結核にかかり高知へ帰ったということです。残念な思いがしたことでしょう。音吉はおばあちゃんを信頼していたようで、いろいろなことを任せていても大丈夫と思っていたようです。

大学2年に落第

音吉は大学2年の時に単位不足で落第をしています。山田一郎先生が漱石全集に書かれていますと話

していました。寅彦がロンドンに居る夏目漱石へ長々とした手紙を書いているようです。その中の一節に、竹崎は落第をしていると書いたようです。夏目漱石は喜んで「竹崎君落第の由。落第のいっぺんぐらい心地よきものに候。ますます奮発しておやりなさいませ」との書簡が全集に載っています。学校の成績の悪い者は、先生は気になるようですね。おじいちゃんも落第をしたから夏目漱石に知ってもらえたということによかったのではないかと思います。音吉は、明治 40 年に高等文官上級試験に合格をしました。その時の人数は 77 名で、明治 17 年から昭和 22 年までの東大からの合格者は 5,969 名と多く、東大が官僚を育てている感じがしました。その中の一人が音吉です。

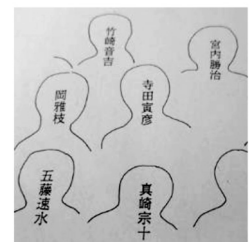
熊本大学五高記念館を訪問

私は熊本大学五高記念館へ 2 回行っています。赤煉瓦のすごい構造の建物です。寅彦の写真などがありました。高知の写真が少ないことから、土佐会の写真を寄贈してきました。この写真は寺田寅彦記念館にも寄贈していますが、そうそうたるメンバーが写っています。

3 年くらい前に森田正馬学会を開催するので、寄贈の写真を使用してよいかの依頼があり、また、森田正馬のことについて書いていただけないかと依頼があり、資料を集めて書きました。

2 回目は、熊本地震の 1 週間前に行ってきました。帰ってきてびっくりしたことでした。

五高には土佐会という有名な自治会があって、徹底的に自治会でかばいあったり、競争したりする組織でした。その中で、試験で赤点を取った仲間を助けなければならないということで、助ける委員に寅彦が選ばれ、しかたがないけれど選ばれたので夏目漱石のところへ行かなければならないということになりました。寅彦は、点数を貰いに夏目漱石の所を訪ねて、のうのうと助けてくれと一応は話したけれども、そこで、俳句に興味をもって、弟子にしてくれないかというくらいに惚れ込んだことが定説になっています。だれが、赤点を取って漱石の所へ行けと言ったのかということについては、音吉だとおばあちゃんが言っていました。



熊本の下宿

寅彦は、熊本大学の裏に黒髪山があって、そこの柏木家へ下宿をしていました。柏木家は、寅彦の父利正が熊本にいた時の部下だったようです。入学後は最初寮へ入らなければならなかったが、環境が悪いので、医者に診断書を書いてもらって、すぐに出て下宿をしました。音吉も一緒に出て、柏木家の隣の田尻家に下宿をしました。ここはまかないがないので、柏木家で食べていました。食事ができたら柏木家から「おい竹崎、飯ができたぞー、早う来い」と毎日呼び掛けがあったようです。随筆「栗の花」のイメージを覆すようなことがあったようです。

写真資料提示



寅彦の長男東一・禮子の仲人をする。



寅彦の二女弥生の結婚式

音吉と寅彦の東京での出会い

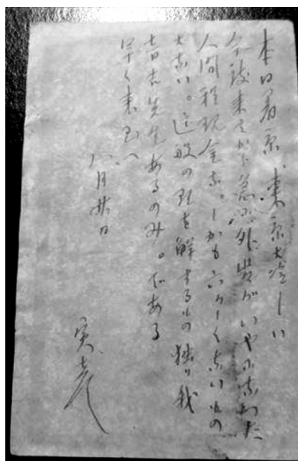
寺田寅彦から明治38年8月に送られて来た手紙が見つかりました。この1通の2日前にも手紙が来ていますが、それは山田一郎の「妻たちの歲月～続寺田寅彦覚書～」に掲載されています。

明治38年8月に音吉は奈半利へ、寅彦は2回目の結婚のために高知へ帰っていました。音吉は日露戦争への召集令状が来て善通寺に行かなければならないので帰っていました。しかし、すぐ除隊となっています。この時に来た手紙です。

この手紙は、堀見さん（本会の初代事務局長）が初めて表に出したというものです。うんと面白い内容です。「本日着京、先に東京へ帰るので早くお前も東京へ帰って来い」という手紙です。「東京は

ちっと冷いね。今度来てから急に外出するのがいやになった。人間ほど現金なししかもむずかしい者はない。」だいぶ伏せこんでいますね。「這般の理を解するもの独り我音吉先生あるのみ。」とおじいちゃん、うんとほがいてもらっています。「早く来たまえ。」ラブレターやね。

「寂しゅうてたまらない。外へ行くのがいや」と伏せこんでいるようです。「人を信用できんし、おんしがおらな寂しいてたまらん。はよう東京へ帰って来いよ」という完全ラブレター。そこまで寅彦に惚れられていたことは何でかな、分からないものがあったことでしょう。ただ、この手紙が竹崎家の大事な家の宝物となっています。



熊本大学・五高記念館（現在休館中）